大正元年	一、一〇一	七五八	九九二	七六二	九一一	六三二	六九三	六八八
大正二年	一、〇七七	七三六	九一九	七五八	八九三	六三〇	六四九	六九八
大正三年	一、〇九〇	六八八	九〇四	七四四	八七九	六〇八	六四九	六五三
大正四年	一、〇九五	六九九	九〇一	七四五	八二四	六二三	六五七	六五七
大正五年	一、一〇二	七三七	九〇九	七四七	八二四	六四〇	六五六	六七四
大正六年	一、一一九	七九一	九〇七	七六三	八三八	七〇一	六六三	七三八
大正七年	一、一二五	八一七	九一三	七七六	八八七	七六五	六七一	七七七
大正八年	一、一〇一	八一七	九一六	八〇〇	九〇三	八〇六	七二七	七八六

第二節　皇太子殿下の行啓と當時の本校概況

皇太子殿下の御動靜

畏くも　皇太子殿下に於かせられては、大正九年三月三十一日、三角港に御上陸、往年開校式當時の文部省專門學務局長濱尾東宮大夫を始めとして、入江侍從長、東郷御學問所總裁等多數の供奉員を從へさせられ、午後三時五分、本校に御着、本校職員と武裝せる生徒とは、本門外西側に整列して奉迎申上げた。殿下は、吉岡校長の御先導にて本館階上の御休所に暫し御休憩、吉岡校長・杉山教授に對して單獨拜謁を賜はり、恭しく校長より捧呈せる本校概況書並に本校寫眞を御一覽の後、事務室に移らせられ、階上の賜謁室に於て、本校高等官、宮中席次第六階以上に該當する傭外國教師、囑託講師、校醫等三十四人に列立拜謁を賜はり、次に、台覽品陳列室に於て、後に記すところのものを御覽になり、當該學科擔當教授各一名の説明を聞召された。それより體操場（武夫原）に出御、高等科理科第一學年を編成し、大學豫科第三學年を幹部とする中隊教練を觀され、再び御休所に御少憩の後、三時四十五分、本門外東側に整列せる職員生徒の奉送を受けつゝ、還御遊ばされたのである。

行啓に關する具申書

皇太子殿下の還御

武夫原に於て奉迎の職員生徒

備考　行啓ニ關スル具申書

本年三月三十一日　皇太子殿下本校ニ行啓在ラセラル當日濃霧ノ爲熊本縣下三角ヘノ御入港著シク遲レ隨テ本校ニハ午後三時五分ニ至リテ御着アリ濱尾東宮大夫、入江侍從長、東郷御學問所總裁等數多ノ供奉員之ニ從フ本校一般職員生徒（武裝）ハ本門外西側ニ整列シテ奉迎シ小官ハ御先導申上ク本館

階上ノ御休所ニ於テ御少憩後小官及教授杉山岩三郎ハ單獨拜謁ヲ賜フ訖テ本校概況書並本校寫眞ヲ捧呈ス夫ヨリ事務室ニ移ラセラレ階上ノ賜謁室ニ於テ本校高等官並宮中席次次第六階以上ニ該當ノ傭外國教師、囑託講師、校醫等三十四人ニ列立拜謁ヲ賜フ次イデ台覽品陳列室ニ於テ別紙說明書記載ノモノヲ台覽アラセラレ當該學科擔當教官各一名ノ說明ヲ聞シ召サル而シテ體操場ニ出テサセラレ體操台覽所ニ於テ高等科理科第一學年生徒ノ全員ヲ以テ編成シ大學豫科第三學年生徒ヲ以テ幹部トセル中隊教練ヲ閲サレ再ヒ御休所ニ御少憩後三時四十五分熊本高等工業學校ニ向ケ御出發在ラセラレ職員生徒ハ本門外東側ニ整列シテ奉送セリ

右具申候也

大正九年四月六日

第五高等學校長　吉岡郷甫

濱尾大夫の通牒

文部大臣　中橋德五郎殿

是より先、三月十四日付を以て、濱尾東宮大夫より、「皇太子殿下來二十三日東京御發九州へ行啓同三十一日三角御上陸熊本市へ行啓午後貴校へ行啓可被爲在候　追テ御微行」の旨通牒があつたので、本校に於ては、直に熟議の末、三月十七日、「東宮行啓事務ニ關スル役割」として、台覽係・警備係・設備裝飾係・庶務接待係の諸係を定め、萬端遺漏のないやうに、最善の努力を盡したのである。

備考

大正九年三月十四日

東宮大夫男爵　濱尾　新㊞

第五高等學校長　吉岡郷甫殿

通牒

皇太子殿下來二十三日東京御發九州へ行啓同三十一日三角御上陸熊本市へ行啓午後貴校へ行啓可被爲在候

追テ御微行

東宮行啓事務ニ關スル役割

台覽係（台覽物ノ收集、作製、陳列、說明及台覽體操ノ計畫、實施並ニ奉送迎ニ關スル事務）

主任　小松教授

歷史　牧山教授　*小松教授　今村教授

物理　*平塚教授　田上教授

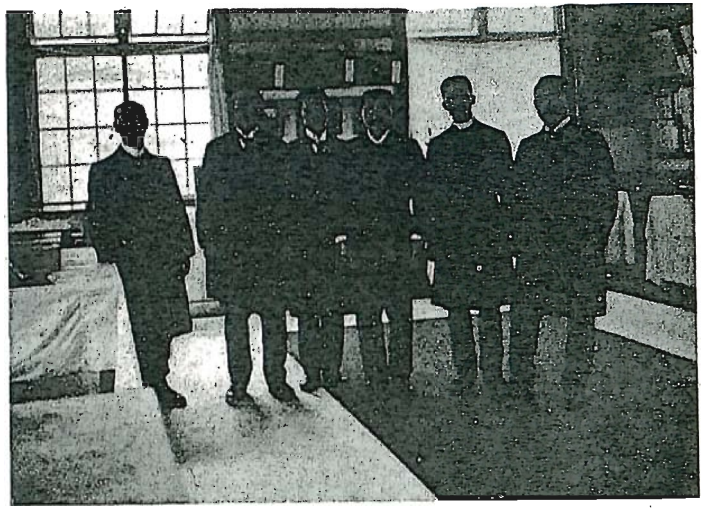
化學　*白壁教授　近藤教授

植物及動物　脇谷教授　*淺井教授

鑛物及地質　*中島教授

圖畫寫眞　*松本教授　池田教授

行啓事務に關する役割



台覽品說明者

（向つて右よりつ）中島・淺井・平塚・本松・白壁・小松諸教授

體操　松尾講師　坂根講師　江口講師　古屋講師

（備考）＊八台覽品說明者

台覽品說明書

一、歷　史

宮本武藏

一、達磨ノ畫　熊本市　井芹經平所藏

一、達磨ノ畫　飽託郡　野田辰三郎所藏

一、獨行道　同

柏原太郎左衞門

一、菊原如安謝罪狀　八代郡　柏原俊彦所藏

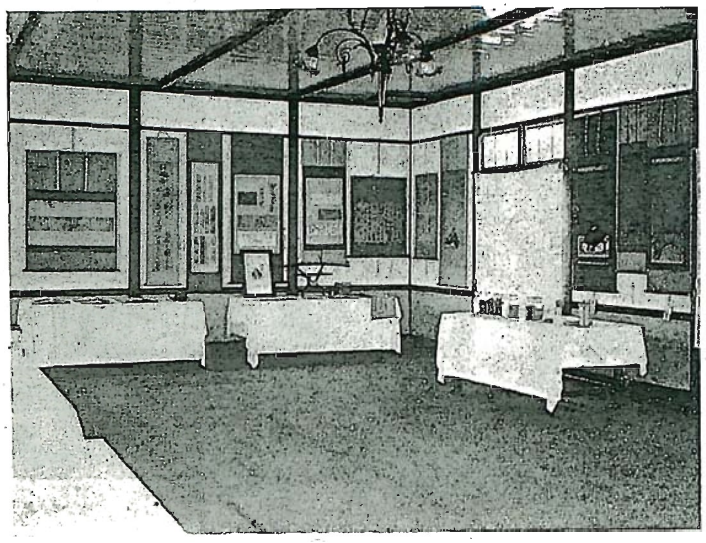
贈從三位　細川重賢

一、細川重賢肖像　侯爵　細川護立所藏

一、細川重賢花草虫類寫生圖　同

贈正五位　林藤次

一、林藤次肖像　飽託郡　石原醜男所藏



台覽品の一部

贈正四位　横井平四郎

一、横井平四郎肖像　熊本市　河田精一所藏

贈正四位　宮部鼎藏

一、吉田松陰佩刀　八代郡　宮部增義所藏

一、宮部鼎藏遺墨（孝忠）　同

一、天盃　同

一、宮部鼎藏遺墨　熊本市　田尻昇藏所藏

贈正四位　橋木武兵衞

一、橋木武兵衞獄中書志士列傳　熊本市　河島豐太郎所藏

贈正四位　松村大成

一、松村大成遺墨、外一點　玉名郡　松村秀文所藏

贈從四位　永鳥三平

一、松村永鳥遺墨　飽託郡　大田黑允彦所藏

贈正五位　西島龜太郎

一、西島龜太郎遺墨　熊本市　萱野輝秀所藏

木原楯臣

一、竹簾　八代郡　緒方弘國所藏

一、遺　刀　同
太田黑鐵平
一、太田黑鐵平遺墨　飽託郡　太田黑允彦所藏
齋藤求三郎
一、齋藏求三郎手寫蘭書　熊本市　齋藤久熊所藏
緒方弘國
一、小　旗　八代郡　緒方弘國所藏
加屋霽堅
一、加屋霽堅遺墨　熊本市　竹下眞美所藏

二、物　理

「ウエーバー氏」光度計
「エングストレーム」氏輻射計
岩鹽プリズム
電氣波長計

三、化　學

「カーバイト」、石灰窒素、硫安及「セメント」、生蠟及白蠟

四、動物及植物

ムツゴロウ
水前寺苔
「クチナシ」ノ葉ニ現ハルル「マンニット」

五、地質及鑛物

熊本附近產ノ主ナル石材
角閃橄欖岩、角閃安山岩、泥熔岩
鱗硅石
阿蘇火山模型　京都島津製作所製
熊本附近地質略圖　第五高等學校地質及鑛物學教室編

六、圖畫及測量

萬能製圖器械
用器畫及ヒ自在畫
測量圖
油繪及ヒ水彩畫
寫　眞

本校の現況摘記

因に大正九年は、大學豫科並に高等科の並立時代であるので、左にその時捧呈せる本校の現況を摘記して置く。

現況（摘錄）

第一總敍　第一總敍

本校ハ男子ノ高等普通教育ヲ完成スル所ニシテ文部省ノ直轄タリ高等科ヲ置ク但大正十年八月迄ハ尚大學豫科ヲ存置ス

高等科ノ學科ヲ分チテ文科及理科トシ其ノ各ヲ分チテ更ニ甲類乙類トス甲類ハ英語ヲ第一外國語トスル者ニ之ヲ課シ乙類ハ獨語ヲ第一外國語トスル者ニ之ヲ課ス

大學豫科ヲ分チテ第一部、第二部、第三部トシ第一部、第二部ノ各ヲ分チテ甲類、乙類、丙類トス第一部甲類ハ英語法律科、政治科及ヒ經濟科、商科ノ志望者ニ、同乙類ハ英語文科志望者ニ、同丙類ハ獨語法律科、政治科及獨語文科ノ志望者ニ之ヲ課シ、第二部甲類ハ工科ノ志望者ニ、同乙類ハ理科及醫科ノ內藥學科ノ志望者ニ、同丙類ハ農科ノ志望者ニ之ヲ課ス又第三部ハ醫科ノ志望者ニ之ヲ課ス

第二職員　第二職員

本校專任職員ノ定員ハ校長一人、教授三十七人、助教授四人、書記六人ニシテ現在ノ實員左ノ如シ（大正九年三月二十日調）

校長　一人

教授　四十人（內一名ハ校長ヨリ、一名ハ熊本高等工業學校ヨリ兼任、一名ハ外國留學中）

助教授　一人

書記　六人

右ノ外尚左ノ職員アリ總計七十一人ヲ算ス

傭外國教師　二人

囑託講師　六人

囑託教員　四人

囑託校醫　一人

教務雇　五人

事務雇　五人

教員ノ氏名並受持學科ハ左ノ如シ（略）

第三生徒　第三生徒

一、生徒科（部）類別數　高等科ノ生徒ハ概ネ昨年九月入學セル者ニシテ第一學年ニ屬シ、大學豫科ノ生徒ハ一昨年九月以前ニ入學セル者ニシテ第二學年又ハ第三學年ニ屬ス今其ノ數ヲ學科及科（部）類別ニ示セバ左ノ如シ（大正九年三月二十日調）（　）ハ支那人ナリ以下同ジ

種別	生徒 第一年	生徒 第二年	生徒 第三年	生徒 計
高等科 文科 甲類	一二四（五）	八二（二）	六六（一）	一四八（三）
高等科 文科 乙類		三五（一）	三九	七四（一）
高等科 文科 計	一六四（五）	一四三（三）	一二七（一）	二七〇（四）
高等科 理科 甲類	一二四（四）	八三（三）	六三（一）	一四六（四）
高等科 理科 乙類	四〇（一）	一二（一）	七（一）	一九（二）
高等科 理科 計	一六四（五）	二〇（四）	九〇（一）	二一〇（六）
合計	三二八（一〇）	三〇一（七）	二五四（三）	五五五（一〇）

種別	生徒 第一年	生徒 第二年	生徒 第三年	生徒 計
大學豫科 第一部 甲類		二六	二二	四八
大學豫科 第一部 乙類		二五	二〇	四五
大學豫科 第一部 計		二五	二〇	四五
大學豫科 第二部 甲類		二六	二二	四八
大學豫科 第二部 乙類		二五	二〇	四五
大學豫科 第二部 計		二五	二〇	四五
大學豫科 第三部		三八	七三	七五
合計		三八	七三	七五

三、生徒ノ年齢　生徒ノ年齢ハ最長三十四年一箇月、最少十七年一箇月ニシテ平均二十年七箇月ナリ今之ヲ科（部）別ニ就キ學年別ニ示セバ左ノ如シ（大正九年三月二十日調）

種別	最長年齢 文科	最長年齢 理科	最少年齢 文科	最少年齢 理科	平均年齢 文科	平均年齢 理科
高等科 第一學年	二二年一一月	二六年四月	一七年一月	一七年一月	一九年五月	二〇年五月
大學豫科 第二學年 第一部	二六、一一		一九、〇		二一、二	
大學豫科 第二學年 第二部	二一、一一		一八、一一		二〇、一〇	
大學豫科 第二學年 第三部	二五、九		一九、一		二〇、〇	
大學豫科 第三學年 第一部	二五、七	三四、一	二〇、一	二〇、一	二二、一	二二、二
大學豫科 第三學年 第二部		三〇、三		二〇、〇		二二、二

四、習學寮（寄宿舎）生徒數　習學寮ハ生徒ヲ寄宿セシメ本校ノ教育ト相俟ツテ之ヲ訓練スル所トス而シテ新ニ入學シタル者ハ少クモ一學年間ハ特別ノ事情アル者及本校ニ於テ通學ヲ命ズル者ノ外總ベテ之ニ寄宿スベキモノトス現在ノ在寮生徒數ヲ科（部）別ニ就キ學年別ニ示セバ左ノ如シ（大正九年三月二十日調）

種別	高等科 文科	高等科 理科	大學豫科 第一部	大學豫科 第二部	大學豫科 第三部	計
第一學年	一〇二	一〇九				二一一
第二學年			七	五	三	一五
第三學年			六	二	二	一〇
計	一〇二	一〇九	一三	七	五	二三六

第四入學志願者及入學者

第四　入學志願者及入學者

一、入學志願者及入學者ノ學歷別數　本校高等科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ中學校第四學年ヲ修了シタル者、高等學校尋常科ヲ修了シタル者、高等學校高等科入學資格試驗ニ合格シタル者、專門學校入學者檢定規程ニ依リ試驗檢定ニ合格シタル者、文部大臣ニ於テ高等學校高等科ノ入學ニ關シ指定シタル者及文部大臣ニ於テ一般ノ專門學校ノ入學ニ關シ中學校卒業者ト同等以上ノ學力アリト指定シタル者ニシテ、昨年ハ恰モ其ノ最初ノ施行期ニ屬セシカバ入學志願者ハ本校未曾有ノ多數ニ上レリ而シテ入學者ハ中學校卒業者中昨年ノ卒業者過半ヲ占メ一昨年ノ卒業者及昨年ノ中學校第四學年修了者之ニ次ゲリ今志願者中ノ受驗者ト入學者トノ數ヲ科別ニ就キ學歷別ニ示セバ左ノ如シ（大正八年九月末調）

種別	文科		理科		合計		
	志願者	入學者	志願者	入學者	志願者	入學者	同上百分比
中學校第四學年修了者	二五二	二八	二九一	二八	五四三	五六	一〇、三
中學校卒業者 本年卒業（大正八年）	三六一	八一	三三二	七四	六九三	一五五	二二、四
前年卒業（大正七年）	一七九	三一	一三〇	三六	三〇九	六七	二一、七
二年以前卒業（大正六年）	六三	五	三二	四	九五	九	九、五
三年以前卒業（大正五年）	二五		一一	二	三六	二	五、六
四年以前卒前（大正四年）	三		六		九		
五年以前卒業（大正三年）	二		五		七		
六年以前卒業（大正二年）	一				一		
七年以前卒業（大正元年）	二				二		
八年以前卒業（明治四十四年）	一		一		二		
九年以前卒業（明治四十三年）	一				一		
計	八九〇	一四五	八〇八	一四四	一六九八	二八九	一七、〇
專門學校入學者檢定規程ニ依ル試驗檢定合格者	一		三		四		
文部大臣ニ於テ高等學校高等科ノ入學ニ關シ指定シタル者	一三		一七		三〇		
文部大臣ニ於テ一般ノ專門學校ノ入學ニ關シ中學校卒業者ト同等以上ノ學力アリト指定シタルモノ	二六		二〇	一	四六	一	
第一高等學校豫科卒業者	七	七	七	七	一四	一四	
總計	九三〇七	一四五七	八四八七	一四五七	一七七八一四	二九〇	一六、一八

二、入學者ノ年齡　昨年九月入學セシ者ノ入學當初ニ於ケル年齡ハ最長二十四年四箇月最少十六年七箇月ニシテ平均十八年九箇月ナリ今之ヲ科別ニ就キ示セバ左ノ如シ（大正八年九月調）

	最長		最少		平均	
文科	二二、四年月	理科	二四、一年月	文科	一六、七年月	理科	一六、七年月	文科	一八、九年月	理科	一八、九年月

第五　退學者及死亡者

第五退學者及死亡者

昨年三月二十一日ヨリ本年三月二十日ニ至ル退學者及死亡者ハ三十六名ニシテ之ヲ科（部）別ニ就キ事由別ニ示セバ左ノ如シ

種別	高等科 文科	高等科 理科	大學豫科 第一部	大學豫科 第二部	大學豫科 第三部	計
疾病ニ因ル者			二	四	二	八
家事繁累ニ因ル者			五	二	二	一〇
學業不進ニ因ル者	一		三	五	一	九
不都合ノ行爲ニ因リ退學ヲ命シタル者				一		一
授業料不納ニ因ル者		二		二	一	五
計	一	二	一〇	一四	六	三三
死亡者			三			三
生徒百人ニ對スル退學ニ比スル例	〇、六一	一、二二	三、七〇	六、六三	八、〇〇	三、七三
生徒百人ニ對スル死亡者ニ比スル例			一、一一			〇、三四

第六卒業者

第六　卒業者

一、創設以來卒業者年次別　本校創設以來卒業者ヲ出スコト二十八回ニシテ其ノ數四千六百九十三人ニ及ブ（專門部ヲ除ク）今之ヲ學科別ニ就キ年次別ニ示セバ左ノ如シ（大正八年七月調）

種別	本科 明治二十五年	本科 明治二十六年	本科 明治二十七年	本科 小計	豫科 明治二十八年	豫科 明治二十九年	豫科 明治三十年	豫科 明治三十一年	豫科 明治三十二年	豫科 明治三十三年	豫科 明治三十四年	豫科 明治三十五年	豫科 明治三十六年	豫科 明治三十七年	豫科 明治三十八年	豫科 明治三十九年
法科	四	二一	二一	四六	二六	三六	五四	五九	五八	四一	五八	三一	四七	七二	八一	五八
文科	二	六	八	一六	一二	一四	二八	三一	一七	二五	一四	一二	二四	二二	一四	一三
工科	五	六	六	一七	二二	二〇	三二	三〇	三八	三八	二五	二七	二八	三六	三一	三三
理科	三	四	三	一〇	四	四		一	二	一	五	五	七	八	七	四
農科			四	四	六	四	二	三	一	三	二		一〇	一〇	一一	一一
醫科ノ内 藥學科															二	一
醫科							二八	三六	一九	三二	二五	二六	二八	三七	三五	四一
計					七〇	七八	一四四	一六〇	一三五	一四〇	一二九	一〇一	一四四	一八五	一八一	一六一

	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	小計	合計
	大學														
	九一	八三	七二	一一〇	七九	八七	九二（一）	一〇七（三）	九三（二）	八五	八七	七五（一）	九五（四）	一七七七（一一）	一八二三（一一）
	一七	二〇	二五	二六	二一	二七	一九	二三	二八	二四	二六	二〇	二四（一）	五二五（一）	五四一（一）
	三三	三四	三二（一）	三八（二）	四三	五八	七七（二）	六一（一）	五七（一）	五〇（二）	六一（一）	五八（二）	六三	一〇二五（一二）	一〇四二（一四）
	四	一〇	七	四	六	六	三	五	四（一）	四	四	一一	一四（一）	一三〇（二）	一四〇（二）
	一九	二一	一九	二三	二七	二五	二九	一四	一五（一）	二一	九	五	七（一）	二九七（二）	三〇一（二）
	三	二	三	四	三	三	一	三	一	二	二		一	三一	三一
	三四	三六	三八	四〇	四二	三八	四二（一）	三五	四〇	三二	三四	三三	三三（一）	七八四（二）	七八四（二）
	二〇一	二〇六	一九六（一）	二四五（二）	二二一	二四四	二六三（四）	二四七（四）	二三八（五）	二一八（二）	二二三（一）	二〇二（三）	二三七（九）	四五六九（三一）	四六六二（三一）

舊規程に依る最後の告別式入學式

而して九年六月十二日には、第三部第三學年、同二十一日には、第一部竝に第二部第三學年生徒の告別式を擧行し、同七月十一日よりは、入學試驗も開始せられ、同九月十三日には、入學式も執行せられた。蓋し舊規程に依る最終のものである。

第三節　開校第三十週年

三十週年の起算

創立と開校とは日を異にし、從つて別箇のものとなつてゐる所もあるが、本校に在りては、全く異語同義である。故に吉岡校長より中橋文部大臣・關屋書記官等に宛てた信書には、本校三十週年とあり、事務分擔起案には、本校創立三十週年又は第三十週年とあり、庶務課から職員宛の回章竝に第五高等學校一覽には、開校第三十週年とあるのでも分る。但、開校を古城時代とするか、龍南時代とするかは、見解の相違である。卽ち前にも屢〻申した通り、本校の創立は、明治二十年四月で、入學式を擧行したのは、同年十一月のことであるので、開校を以て入學式擧行と同義にすれば、創立も開校も同年である。從つて、創立の明治二十年から算へると、大正九年は、三十三年目に當り、新校移轉から算へると、三十一年目に當り、二十三年十月十日の新校開校式から算へると、三十年目に當る。故に大正九年十月十日の記念式典は、新校移轉を以て創立とし、開校としたことになるので、この點は昭和十二年の五十年記念が、古城舊校の二十年から起算したのと、その趣を異にするものである。尤も、古城舊校の創立當初に入學した人々も、新校開校と共に移り學んで、二十五年七月十日を以て卒業したのであるから、何れにしたところで、大した變りはないことは云ふまでもない。けれども、假りに三十週年の記念事業の一つとして、校史を編纂したとするならば、その編者が、筆者と同樣の關心を古城當時に有したものであるかどうかは、遽に斷言出來ないのである。